Osaka University Knowledge Archive

Title	タイ語の「主題」
Author(s)	カンブンシュー, ラピーパン
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/34542
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　カンブンシュー　ラピーパン　　）	
論文題名	タイ語の「主題」

論文内容の要旨

タイ語に目的語などの主語でない成分が文頭に置かれる表現がある。また、新しくできた構文は、基本語順と同じ要素が用いられるにもかかわらず、語順を変えることによってニュアンスが異なる。これについてタイ語の先行研究では、話し手が文で最も焦点を当てたいものを文頭に置くという説明が主流であった。しかし、その説明だけでは不十分である。話し手が文で最も焦点を当てたいものといっても全ての成分を自由に文頭に置くことができるわけではない。これが本研究の出発点である。

本研究でタイ語の主題をめぐって主題の成立条件、主に意味の観点から考察を行った結果、次のようにまとめられる。

タイ語は主題卓越言語であり、双方の文内の成分と文外の成分が主題になれる。即ち、主題は文レベルのものと談話レベルのものがある。文内の成分が文頭に置かれて主題になる、つまり文内の主題の場合は、主題と叙述部が「説明対象－説明内容」、または「処置課題－処置内容」に読める場合に限って文が成立する。「説明対象－説明内容」における説明内容は、主題の属性・状況と捉えられるもの、または主題に対して影響を与えると想定できるものでなければならない。一方、「処置課題－処置内容」はタイ語では叙述部の述語に完了を表す「 lέεo」または、未来時制とともに話し手の意志を表す「cà」を加えることにより、主題が課題と意識しやすい。この解釈はいわば、「説明対象－説明内容」に近い側面がある。即ち、主題が処置する対象で、「 lέεo」をつける場合はその課題が完了している状態にあるという解釈、「cà」をつける場合はその課題がこれから処置する予定になっている状況にあるという、主題の説明にも捉えられる。

文外の主題は、二重主語構文のように成立条件が文内の主題に相当するものがある。二重主語構文は文内の主題と同様、「説明対象－説明内容」と捉えられ、叙述部は主題の属性、または主題に影響を与えることと解釈できることが重要な条件である。また、左方転位構文の先行名詞も文外の主題と見なされる。左方転位構文は、文内の要素が文頭に移動され、元の位置に主題と同一指示となる代名詞が存在する。よって、前置詞が要求される成分を主題化することが可能になる。他に、文外の主題で、格関係、または同一指示代名詞で意味が保証されず、文脈や話し手と聞き手の持つ情報・百科事典的知識によって意味が保証されるものもある。本研究ではこれらの主題と叙述部の関係を①「問い－答え」関係、②包含関係、③線で結ぶような対応関係、そして④対象を特定する関係に分類し、それぞれの特徴を考察した。その結果、話題設定の主題のうち、ある条件の下で結合されるものがあることが明らかになった。

また、本研究ではこれまで注目されなかったタイ語における「X　mii Y　Z」構文を主題文として取り上げ、考察した。「mii」は一般的に動詞として「いる・ある」、または「所有する」を意味するが、「X　mii Y　Z」では、「mii」に後続する「Y　Z」が X の属性・状況に関する説明を与えると読める。つまり、文が「説明対象－説明内容」の意味条件によって成立する。従って、「X　mii Y　Z」構文はタイ語の主題文の一種だといえる。ちなみに、文内の主題と文外の主題（場所格）は両方「X　mii Y　Z」の主題になれる。

最後に、映画、テレビ番組、インターネットサイトの掲示板で実際に用いられている主題文を収集し、タイ語の主題の使用環境を考察した。主題は文レベルの概念だけではなく、談話レベルでも重要な役割を果たすことがわかった。主題は文内か文外かを問わず、話題を導入・転換する、または文の焦点を強調する働きをする他に、後続する文の成分の省略にも影響を与える。また、本研究の実用例を観察した限りでは、主題提示の標識を伴うことと、主語が左方転位されることが目立つ。これらの手段は、日本語の間投助詞に近似し、主題が特別な位置にあることを強調するとともに主題と叙述部に断裂があることを明確にするためだと考えられる。

考察した結果、タイ語において意味条件が満たされれば、主語以外の成分および文外の成分が文頭にくることが可能であることが明らかになった。タイ語は語順の制約が重要だと言われているが、本研究の結果から主題はタイ語の伝達表現において、SVOの基本語順と並ぶ重要な語順の制約の一つだと言える。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名	（カンブンシュー　ラピーパン　　）		
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	堀川　智也
	副 査	教授	筒井　佐代
	副 査	教授	宮本　マラシー
	副 査	准教授	加藤　昌彦
	副 査	准教授	荘司　育子

論文審査の結果の要旨

タイ語は、日本語の「ハ」のように明示的に主題を示すマーカーを持たないため、タイ語において「主題」とはいかなる成分として規定するのか、その規定そのものが問題となる。そのため、本論文においては、主格項以外の名詞句が文頭に特別に文頭に置かれる場合を有標の場合、即ち、「主題」を表す場合、と規定して論を進めるが、これに対し、審査委員から、「主語」が文頭に置かれる場合をはっきりと排除して論を進めるべきではなかったのか、という意見が出された。これに対し、論文執筆者の側から、タイ語において、有標の語順を取る場合に特化して論文を作成した旨の説明がなされた。

次に、審査委員から、日本語の主題論で言われる「処置課題」という意味的立場で主題になる例は、タイ語においては「処置課題」とみなす必要はなく、「説明対象」でいいのではないか、という意見が出された。これに対し、論文執筆者からは、明らかに「説明対象」とはいいがたく「処置課題」として解釈すべき例が提示された。

次に、審査委員から、本論文は、日本語における主題研究の成果を援用するのはいいが、それにひきづられすぎているのではないか、例えば日本語では「主題」と認められないが、タイ語では「主題」と言いたくなるような成分を見逃しているのではないか、という意見が出された。これに対し、論文執筆者からは、確かにその側面がないとはいえないが、現段階で、主題研究が最も進んでいる日本語の主題研究の成果を糸口に論をすすめざるをえなかったことが説明された。しかし、審査委員の側からは、これは今後、重要な側面であり、その論点は、本論文で扱うべきではなかったか、という意見が出された。

次に、審査委員から、本論中の主張として「断裂」というキーワードについて、タイ語で「断裂」という要件は主題の要件に本当に必要なものか、という質問が出された。この点に関し、論文執筆者からは、タイ語において、話しことばにおいて、確かにポーズが置かれること、さらに書きことばにおいても、単語と単語の間に若干の空白をおいて書かれることがあることが説明され、タイ語において、確かに「断裂」が存在することが説明された。

他にも、本論文に対する質問が多方面から出されたが、そのいずれに対しても的確な受け答えがなされた。

本論文は、「主題」という、統語的にも意味的にも非常に扱いにくいテーマに対して果敢に挑戦し、一定の成果を挙げた。タイ語の主題研究の研究はこれまでに、世界的に見てもほとんどなく、本論文が現時点で最も進んだタイ語の主題研究といえる。タイ語において、主語以外の名詞句が文頭に置かれるという特別な有標な語順を取ることが自然に許される文の類型を洗いざらいリストアップし、それぞれについて、その構文が使用可能になる要件を細かく検討している点で、今後、タイ語に限らず、他の主題卓越型言語における主題研究においても大きな貢献をなすことが期待される論考である。

以上の点から、博士（言語文化学）を授与するにふさわしい高水準の論文であると、審査委員全員が一致して認めた。